夏目漱石の『こころ』—西洋の影の下に（1）*

Sôseki Natsume's *Kokoro*——Under the Shadow of the West (1)

英語教育講座　伊　藤　徳一郎
ITO Tokuichiro

I. 現代と明治

千円札から夏目漱石の姿は消えた。しかし「国民的作家」としての漱石の人気そのものはかわりなく，その作品は今も多くの人に読み継がれている。

処女作の『我輩は猫である』（1906）から未完の遺作『明暗』（1916）に至るまで，漱石が残した小説はスタイルもテーマも実に様々である。我々読者の漱石の作品に対する興味や関心もおのずから異なってくる。その違いは別として，漱石の作品が今なお多くの読者に愛されるのは，例えば，「青春小説」，「教養小説」の古典・名作と言われる『三四郎』（1908）という作品の存在を考えてみればその理由がよくわかるだろう。

この小説は，九州の田舎から東京の大学へ進む小川三四郎という，うぶな青年の成長話である。三四郎は都会の大学生活において，誰もがそうであるように，多くの人にめぐりあい，いろいろなことを学ぶ。そして一方で，里見美禰子なる美しい女性に出あい，恋をする。しかし，このほのかな恋は，結局は美禰子のあやしい魅力に振り回された三四郎のほろ苦い経験に終わる。

かくして，三四郎という青年は，未知の東京という世界で，大学に入り，人とめぐりあい，恋を経験し，挫折を味わい，試行錯誤を繰り返しながら教養を積み，人生や社会に目覚め，大人になってゆく。このストーリー・パターンは，明治という舞台衣装=背景を取り除けば，実は，典型的な「イニシエーション・ストーリー」（通過儀礼物語）あるいは「ビルドゥングス・ローマン」（教養小説）のそれであり，三四郎物語は，基本な骨格は，そのまま現代の青年や大学生にもあてはまるのである。青春，大学生活は明治であれ，今日であれ，大人へ成長するための試行錯誤の期間，修養の期間である点において変わりない。

『三四郎』を読むとき，我々は，こうした，時代や社会の隔たりを超えた，いつに変わりない永遠の「青春物語」を与えられる。今日の我々の共感を呼びさます所以である。漱石の作品の大きな魅力は，あたりまえながら，まずはその超時代性にあると言ったらよいだろうか。

他方，これと対峙する漱石のもう一つの魅力も，同じく『三四郎』という小説のなかに象徴的に同居している。その魅力とは何だろうか。それは，やはり何といっても，この小説がすぐれて明治的な傑作であるからに他ならないだろう。我々読者は，小説『三四郎』を読みながら，主人公三四郎とともに明治の空気を吸い，明治の社会と文化に触れ，明治に生きた人の経験を共有することができるのだ。

ただ，明治との触れ合いと言っても，それが単なる回顧趣味に留まるものであれば，『三四郎』といった作品を含め，漱石そのものが現代において，これほどまでに多く読まれ，漱石研究が「漱石産業」と形容すべきほどの活況を呈することはないだろう。

日本は，明治という時代において，西洋化により近代的な国家に生まれ変わり，今日に連なる社会を築き上げてきた。この意味で，明治が今日の我々の近代＝西洋的社会の源であるとすれば，明治に触れることは，我々日本人にとって，今の日本社会のルーツをさかのぼることになろう。そして同時にまた，そのルーツをふりかえることにより，今の社会を知るすべとなす。まさに温故知新である。

---

*本稿は，岐阜大学教育学部における「異文化理解」の授業内容の一部に基づくものである。

明治に生きた日本人は，好むと好まざるとにかかわらず，「西洋文化」の強烈な洗礼を受けた。その衝撃は，「西洋文化」に対する，驚き，興味，あこがれ，嫌悪，戸惑い，苦しみ，その他もろもろの「原体験」を日本人のこころに刻みこんだ。つとに指摘されることであるが，今日，我々日本人が「西洋文化」，「欧米文化」に対して抱く共感，あるいは反感の根底には，多かれ少なかれ，この明治の「原体験」が今に尾を引いていると言っても過言ではなかろう。

「文明開化」の国策の下，国民すべてが等しく「西洋化」を強いられた明治の日本。翻って，今日の日本。我々を取巻く世界では，政治・経済・文化，その他あらゆる場において「グローバリゼーション」が拡大・進行している。そして「インターネット」の時代となり，世界がそのネット・ワークにより一つに結ばれ，情報や通信面においては，国家間の距離や境界がなくなっている。日本は，この「グローバリゼーション」と「インターネット」に象徴される「国際化」のなかで，今やつねに「国際社会」の一員として行動し，その責務を果たすことを世界の国々から強くもとめられている。日本に限らず，いかなる国といえども，世界の動向や枠組から離れては存立し得ない。これが今日の世界であり，好むと好まざるとにかかわらず，日本はこの「国際社会」の中で生きることを余儀なくされているのである。

「国際社会」との結びつきは，多くの利益をもたらす。例えば，アメリカを発進源とする，いわゆる「ＩＴ革命」は，日本にも押し寄せ，同盟国日本をその渦のなかに巻き込んだ。日本は，アメリカの動きに同調する，というより同調させられる形で，「ＩＴ化」に乗り出し，アメリカに追いつくべく，「ＩＴ化」を国策にかかげ，懸命に取り組んできた。結果，「ＩＴ化」は，パソコン，インターネット等，情報・通信技術の飛躍的な進歩をもたらし，我々は今その新しい技術文明の限りない恩恵に浴している。これはまぎれもない事実である。しかし，「ＩＴ化」は諸刃の剣で，その恩恵の一方において，多大な負の遺産を我々に押し付けた。これもまた，等しく，まぎれもない事実である。

「ＩＴ」の波は，情報・通信分野のテクノロジーにとどまらず，日本の経済，産業，さらには幅広くその文化に及び，我々日本人のものの考え方や生活形態・行動様式すら大きく変革した，といわれる。「ＩＴ」の最たる「パソコン」や「携帯電話」の普及は，「個性の喪失」，「声の文化の喪失」，「人間関係の希薄化」，「機械的人間観の氾濫」，「インターネット犯罪」，「モラルの低下」，「日本的美風の消失」等，深刻な社会問題を多く生みだした。このことは，「ＩＴ化」の看過できない弊害として我々の肝に銘ずべきであろう。

さらに「ＩＴ革命」についてはもう一点，重要なことを我々は忘れてはならない。それは，「ＩＴ革命」なるものが，本来的には，世界をリードする，あるいはリードしようとするアメリカがコンピューター・ネットワークによる「経済戦略」として発想したものである，という点である。単純に言えば，アメリカが自国を軸として世界経済システムの構築をめざした，その経済政策の一環に過ぎなかったのである。しかし，この情報・通信技術の進歩は，やがてアメリカを世界の情報・通信のセンターにのし上げ，アメリカを経済のみならず文化のセンターと化してゆく。アメリカの文化は，世界文化のヘゲモニー(覇権)をにぎり，グローバル・スタンダートとなってゆく。他方，その裏では他の多くの国々の固有の文化がアメリカの文化に吸収・同化，いわゆる「アメリカナイズ」され，アイデンティティを喪失している。実に，「ＩＴ革命」は，アメリカを世界の「文化帝国」に築き上げ，アメリカによる世界の文化支配を推し進めていると言っても過言ではなかろう。アメリカの一番の同盟国日本が，このアメリカの「文化支配」の傘下に置かれていることは言うまでもない[1]。

このように，わが国における「ＩＴ」の浸透は，他国の場合と同様，情報・技術よりも，結局はアメリカという大国の「文化受容」の問題と大きくかかわってくる。アメリカという大国からやってき

[1]「ＩＴ」にかかわる問題に関しては，主に『ＩＴ革命―光か闇か』（『別冊 環』　藤原書店　2000.11）を参照した。

た「ＩＴ」は，いまや一つの文化とよんでも差し支えないほどにわが国に浸透し，定着している。「パソコン」,「インターネット」,「携帯電話」のない生活は，もはや考えられないだろう。我々としては，先にあげた「ＩＴ化」のかかえる諸々の弊害を常に認識した上で,「ＩＴ化」を受け入れ,「ＩＴ文化」とともにすすんでゆく他はないだろう。

さて，こうした，アメリカという大国の文化の到来とその受容の問題は，アメリカを「西洋」と置き換えたとき，そのまま明治が抱えた問題であった。明治は，周知のように，西洋列強から開国を迫られ，鎖国から一点，国を挙げて猛烈な近代化＝西洋化に突き進んだ時代であった。文明開化の下，西洋の近代的な文物や制度・風習が圧倒的な力をもって日本に押し寄せ，氾濫した。人々は「西洋」の技術文明に触れ，それを取り入れ，あるいは又，そのハイカラな「西洋文化」にあこがれ，それを模倣した。日本はあっという間に「西洋化」を遂げ,「西洋」の仲間入りを果たした。しかし，この急速な「西洋化」は，一方において日本の伝統的な社会や文化と衝突し，摩擦をおこし，それをゆがめた。多くの人がこの強いられた，漱石の言葉を借りて言えば,「外発的」で「上滑り」な「開下」(『評論ほか』,「現代日本の開花」)[2]に苦しめられた。

かくして明治と現代は，歴史上，日本が「外来文化」に接し，その影響を最も蒙った「国際化」の時代であり，国民がその圧倒的な力に否応なく対峙させられた時代とも言えよう。国民は，等しくその恩恵に要したが，強いられた「国際化」,「外来文化」に苦しんだ人々も一方に多く存在する，そんな共通の時代なのである。

我々が漱石の作品を読むとき，つよく惹きつけられるおおきな理由の一つも，実はこの強いられた「国際化」の「原体験」として，明治の時代が蘇り，我々のこころを揺さぶることにある。作品のなかに描き出された明治という時代が，今ある日本の社会や文化のありようと二重写しとなり，それを照らし出す「鏡」と化すこと。つまり，明治を読みつつ現代の日本を併せ読むという，あるいは明治に今ある自分を見るという，二重の醍醐味を味わう面白さにあるのだ。

「維新の革命と同時に生まれた余から見ると，明治の歴史は即ち余の歴史である」(『評論ほか』,「マードック先生の日本史」)。これはあまりにも有名な漱石の感慨である。漱石は，まさに骨の髄まで明治の人であり,『こころ』(1914) の「先生」が語る「明治の精神」(下 五十五) の体現者であった。では明治の人，漱石が語る明治とはいかなるものであったか。それは今日の我々にいかに蘇り，我々に訴えかけているのだろうか。

Ⅱ．漱石の英国留学

漱石は，周知のように，熊本の第五高等学校教授時代に，文部省第一回官費留学生として二年間，英国留学を命ぜられた。彼自身は，この留学に乗り気ではなかった。しかし，結局は上司に説得され，官命に従い，重い腰をあげて，明治三十三年（1900）英国に向かった。三十三の歳だった。二年間，遠い異国の全く異質の生活環境の中で，英文学の研究に没頭した。しかしながら，この二年間の留学生活は，漱石にとっては,「英国紳士の間にあつて狼群に伍する一匹のむく犬の如く，あはれなる生活を」強いられた「尤も不愉快の二年」(『文学論』,「文学論 序」) に終わってしまった。

明治時代の留学は，当然のことながら，今日のような国際時代の留学とはまったく事情を異にするものであった。留学者の多くは，新国家建設の一翼を担って，欧米先進国に派遣されたエリートたちであった。しかし，誰しもがついこの間まで鎖国していた文明後進国から一人でいきなり文明先進国へ放り出され，その格差に打ちのめされ，その文化のあまりの違いに戸惑い，苦しめられた。それに国命の重圧がのしかかり，苦労はさらに膨れ上がった。

---

[2] 漱石のテキストは，ルビを除き，すべてそのまま新版『漱石全集』(岩波書店 1993－9) に拠った。引用に際しては，順に該当する巻のタイトル，(作品の場合) 挿話番号，(その他の評論，日記等の場合) 見出し項目を引用末尾の（ ）に記した。

英文学者であった漱石の留学先は，明治政府が近代国家建設の第一モデルとした英国，ヴィクトリア女王治下，「パックス・ブリタニカ (Pax Britannica)」（イギリスを中心とした世界秩序＝平和）を謳歌した，世界に冠たる大英帝国であった。幸か不幸か，漱石には当時の西洋随一の先進国が留学先となったのである。彼が味わった衝撃や困惑・苦しみの大きさは，想像に難くない。英国滞在中に彼が書き記した日記や手紙は，実際に彼の留学生生活が屈辱と孤独にまみれた，巨大な「西洋」との格闘と傷心の日々であったことをなまなましく伝えている。

英国留学は，このように，人間としての漱石には，はた迷惑で実に「不愉快」なものであった。しかし，この「不愉快」な英国留学も，帰国後の作家としての漱石には貴重な経験となった。二年間，英国という西洋一の近代国家に住み，その実態をつぶさに見聞した。実際に目のあたりにした西洋文明の進歩ぶりには，ただ驚くばかりであった。漱石にとって，「英国」の「英」は「ひいでる」あり，「英国」はまさにその名のとおり「ひいでたる国」であった。しかし，一方において，漱石は，この西洋に「ひいでたる国」の近代文明のはらむ矛盾や葛藤も見逃さなかった。「進歩の裏面には如何なる潮流が横はりつゝあるか」（『小品』，「倫敦消息」〔『ホトトギス』所収〕）をみさだめ，繁栄する英国の裏側に「二十世紀の共有病」，すなわち「神経衰弱」（『日記・断片　上』，明治38, 9年　断片32D）という「文明の流行病」（『虞美人草』十二）が存在することをいち早く見抜いたのであった。

「全世界の中尤も最も早く神経衰弱に罹るべき国民が建国尤も古くして，人文尤も進歩せる国ならざる可らず。」「他日もし神経衰弱のために滅亡する国あらば英国はまさに第一に居るべし。」（『日記・断片上』同上）これは，二年間における英国留学の偽らざる漱石の感想のひとつであったのである。

英国留学において，こうした文明社会の二面性をじかに見取ったことは，漱石にとって，「英国」をはじめ，維新後「専一に西洋を模擬せんとする」（同上，明治34年　断片８），「西洋カラ吸収スルニ急ニシテ消化スルニ暇ナキ」（同上，明治34年　日記2）日本のありかたを問い直す，またとない契機となった。後の文明批評家・漱石の批判精神を鍛え上げる基盤となったのであった。

漱石は，明治三十五年（1902）英国から帰国。しばらく第一高等学校，東京帝国大学に勤めるがそのかたわらで，第一作目の小説『我輩は猫である』を書き上げる。猫の眼を借りた，奇抜な諧謔と風刺にあふれた明治文明批評小説の誕生であった。この後漱石は東京帝国大学を辞し，作家に転進する。本腰を入れて作家の仕事に打ち込むことになったのだが，『我輩は猫である』に始まる明治文明の批評は，彼のまさにライフ・ワークとなってゆく。それは，小説のほか，公演やエッセイの類においても，機会をとらえては，明治の社会や世相・文化のありように批評を加え，いわば明治の「スポークスマン」の役を担うほどの，徹底ぶりであった。

かくして，明治の文明批評家，スポークスマンに徹した，漱石の小説作品は，多かれ少なかれ，いわば，明治という時代の「寓意小説」としての性格・特徴を帯びるに至る。どの小説をとりあげても面白いが，一応ここでは，つい最近まで高校の国語の定番教材であったこともあり，その名をよく知られた『こころ』をとりあげ，その「寓意性」を考察してみたい[3]。

---

[3] ちなみに，アメリカの近代文学研究者として知られるエドウィン・マクレランは，『こころ』について，次のように，主人公達の「無名性 (nameless)」や小説全体の「叙情的単純さ (lyrical simplicity)」に注目し，この作品がすぐれて「寓意的資質（an allegory of sorts)」や「比喩性 (a parable-like quality)」に彩られた作品であることを強調している。

The Heart, perhaps the most loved of Sôseki's later novels, appeared in 1914, two years before the author's death. It is divided into three parts and is told, with great simplicity, in the first person all the way through. The narrator of the first two parts is a young student who befriends the main character, Sensei, and that of the last part is Sensei himself. The young man remains **nameless** throughout; and so does Sensei, for " sensei " is not really a name but a word that is close in meaning and usage to the French " maitre." In fact, none of the other important people in the book have names. Sensei's best friend, whom he betrays, is referred to simply as " K," and the girl they both fall in love with has "Ojôsan," or "Mademoiselle." Such reluctance to give his characters

Ⅲ.「汽車」,「海水浴」,「海」

漱石の小説にはしばしば「汽車」が登場し，それぞれに物語の展開に重要な役割を担っている。たとえば，まさに冒頭に触れた『三四郎』。この小説は，大学入学のため，汽車に乗って九州の田舎から東京へむかう主人公の車中体験が物語の発端になっている。主人公・小川三四郎は，夫が戦争で消息不明になった「女」や戦争で息子を無くした「爺さん」に出会い，その身の上話を聞く。しかし，この三人は，互いに出身地を異にするまったくの他人同士で，たまたま，同じ汽車に乗り合わせたにすぎない。彼らは，しばしの間，何の脈絡も無く同じ空間と時間と移動を共有し，やがて別れ別れにそれぞれの生活に戻ってゆく。

ここには，「汽車」という「個人を軽蔑」(『草枕』十三) する新しい交通メディアが明治の社会に果たした役割が見事に象徴的に語られている，と言ってよいだろう。

「汽車」に乗れば，人々は十把ひとからげに車両に積み込みまれ，有無を言わせず，目的地へと運ばれてゆく。かれらの個人としての自由は許されず，全員が同一の方向へ，同一の速度によって移動を強いられる。しかし同じ「汽車」に乗り合わせても，乗客同士には，かつてのような村的な地縁・血縁関係は存在せず，「汽車」はその空間に結局，各自が互いにバラバラに分離した，縁もゆかりもない自由な，匿名的な人間のつながり=集団を生み出した。

こうした空間や人間集団は，むろん，「汽車」の中だけにとどまるものではなかった。それは，いわば明治という時代に生まれた空間あるいは人間集団の象徴であった。

「汽車」は，明治の時代において，西洋機械文明のシンボルであり，近代化の尖兵であった。日本全土に鉄道網が張り巡らされるのと期を一にして，日本は「汽車」に代表される西洋技術文明に満たされていった。電信，電話，電気，自動車，郵便等々，交通・情報革命が浸透し，日本は文明国家の限りない恩恵に浴したのであった。

しかし，その一方において，西洋化による文明開化は，諸刃の剣でもあった。文明が進めば，おのずと生活レベルは高くなる。しかし，そのレベルが高くなればなるほど，人はさらにそれに追いつき，それを得るために一層の「努力」を強いられる。進歩に遅れないために，互いにたえず「活力」を「消耗」し，「生存競争」を生きてゆかなければならないのである。文明開化により，「一般に生活程度」は「高くなつた」。しかし逆にそれゆえに「生存競争から生ずる不安や努力」のために「生存の苦痛」は増し，生活は「昔より却って苦しくなつているかもしれない」のだ。漱石の指摘する「開花の生んだ一大パラドツクス」(『評論ほか』,「現代日本の開花」) である。

こうした開花の「パラドツクス」は，明治に生きる人々の個々に「生存の苦痛」や「不安」をもたらしたにとどまらず，さらには彼らの社会的なつながりをも大きくかえてゆく力となる。文明の進歩には，なによりも効率性と利便性が求められる。そして効率的でないもの，不便なものは何であれ容赦なく排除され，より効率的で便利なものにとりかえられてゆく。合理化の追求である。

思えば，こうした合理化の論理は，富国強兵，殖産興業を推進する明治日本政府のまさに国づくり

---

names perhaps suggests that Sôseki intended *The Heart* to be **an allegory of sorts**. And indeed,,the **lyrical simplicity** of the entire book has rather **a parable-like quality**. It is as though Sôseki wished here to strip his story of the intellectual and psychological complexity of his earlier works, and write with the intensity of a lyrical poet. For this reason perhaps, *The Heart* is a beautiful book; but it is also much more innocent than its predecessors. [emphasis added] Edwin McClellan, *Two Japanese Novelists: Sôseki and Tôson* (Chicago and London: The University of Chicago Press, 1969), p.52.

中世の「道徳劇」にはじまり，ダンテの『神曲』(*La Divina Commedia*, 1308-21)，スペンサーの『妖精の女王』(*The Faerie Queene*, 1589)，バニヤンの『天路歴程』(*The Pilgrim's Progress*, 1678) 等，「寓意文学」の傑作に事欠かない西洋文学の伝統に照らした，示唆的な『こころ』論と言ってよいだろう。

の論理であった。明治新政府がいち早く鉄道の敷設にとりかかり，全国を線路で一つに結んだのは，まさにそのあらわれであった，と言えよう。鉄道という交通ネットの発達により，人や物の移動が自由となり，飛躍的に増大して都市化・工業化につながっていった。そのプロセスの中で，次第に閉鎖的な「村」社会がつき崩され，日本全体が「都会」中心の社会へと変質してゆく。明治における鉄道は，地縁・血縁から解放された，自由で匿名的な人間集団＝社会システムの誕生に大きくかかわる結果となったのである。『三四郎』という，明治の青年知識人の人間形成をテーマとした，いわゆる「教養小説」が，九州の片田舎＝村から東京=日本の最大都市へとむかう「汽車」＝西洋化のシンボルの出来事から始まる所以であろうか[4]。

では，われらの『こころ』については，どうであろうか。実は，この小説もまた，『三四郎』の場合と同じように，明治という時代の「青春小説」=「教養小説」としての枠組み──『三四郎』とは異なり，死を中心軸とした，いわば明治知識人の負の「教養小説」であるが──を持ち，冒頭に置かれた場面=出来事が明治の新しい仕会のありようを象徴的に語る先導の役割を果たしているのである。その冒頭の出来事とは，他でもない，あの有名な鎌倉海岸の海水浴場のエピソードである。つまり，『こころ』は，その冒頭の海水浴のエピソードが，小説全体のありようを象徴的に集約し，先導役を果たしているというわけである。

『三四郎』における「汽車」と『こころ』の「海水浴」。二つの小説の間にみられる，こうしたエピソードの意味あいは，一体何を物語っているだろうか。「汽車」と「海水浴」は，現代の我々にとっては，とくに何ほどのものでもない。「汽車」は，いまではほとんどその交通機関としての役割を終え，一部のマニアを除き，ふりかえられることもない。また，「海水浴」にしても，毎年の夏の大衆レジャーということでしかない。しかし，これはあくまでも我々「現代人」の感覚であり，『三四郎』と『こころ』が書かれた時代，すなわち明治の人々の感覚とはかけ離れている。今は文字通り，見る影もない「汽車」も，明治の一般大衆にとっては，先にも触れたように，まさに目に見える文明開化のシンボルそのものであり，「二十世紀の文明を代表する」(『草枕』十三) テクノロジーであった。黒い煙を吐き，人を乗せて陸を疾走する鉄車，この新しい西洋テクノロージは，彼らの想像を絶するものであった。彼らは，こうした高度な科学技術を生んだ西洋文明に驚嘆し，ますます憧憬の念を募らせたのであった。「汽車」は，明治の人々にとって，我々現代人が感ずるものとはまったく別物であり，その存在は，いわば彼らが生きた明治そのももであった，といっても過言ではなかったのである。「海水浴」についても，事は同様であった。

手元にある百科辞典によれば[5]，「海水浴」を楽しむという風習はそもそも明治になるまで日本にはなく，明治の文明開化によって新しくとりいれられた西洋の風習であったという。ただ海水に浸るという意味での素朴な「海水浴」ならば，原始的な自然療法として昔から世界中で行われていた。日本でも，「潮浴み」，「潮湯治」などと言われる一種の海水療法が昔から素朴に行われていた。

しかし海水浴場のある近代的な形態の「海水浴」となると，18世紀の半ば，イギリスのR.ラッセルという医師が海水浴の医学的効果を唱道したことに始まる。その考えの根本は，海辺のきれいな空気を吸い，潮風にあたり，海水に浸ることで何よりも心身の健康の維持・回復を図ることにあった。明治にはいり，西洋医学に学んだ日本の医学者たちが，西洋における医療行為としての海水浴の流行

---

[4] ちなみに，若林幹夫は，三四郎の乗った「汽車」について，「『古ぼけた昔』に位置する九州から，輝かしい未来に対する漠然とした予感とともにある東京へと一筋の鉄路をひた走る汽車は，生まれ育った故郷から開花した東京へ，そして東京を中心とする日本へと，自らの世界を広げてゆこうとする明治青年の希望を示す隠喩となっている」と指摘する。「動く世界──『三四郎』から」『漱石のリアル──測量としての文学』（紀伊国屋書店，1999）49頁。

[5]「マイクロソフトEncarta 総合大百科」（DVD-ROM版，2003）及び「スーパー・ニッポニカ」（DVD-ROM版，2002）参照。

を知り，医療的見地から海水浴を奨励した。早くから横浜あたりでは居留外国人の間で海水浴が流行していたが，やがて神奈川の大磯を皮切りに，各地に健康の維持や回復・増進を目的として，本格的な海水浴場が設置され，西洋スタイルの海水浴の慣習が全国に広まった。その過程で西洋と同様に，日本においても海水浴は次第に当初の医療目的から離れ，大衆化とともにレクレーション中心となり，海水浴場も保養地からレジャーセンターへと様変わりして今日に至った，ということである。

要するに近代的な海水浴は，海水の治癒効力を利した医療行為として西洋に始まり，日本にもまず医療を目的として受け入れられ，そののち次第にレジャー化していったというわけである。

ちなみに，『我輩は猫である』の中で，かの苦沙弥先生宅の猫は「海水浴」をめぐって，つぎのように語っているが，それはまさしく明治における，上述のごとき「海水浴」の観念や意味あいを諧謔的に代弁したものに他ならない。

> .....第一海水が何故薬になるかと云へば一寸海岸へ行けばすぐ分る事ぢやないか。あんな広い所に魚が何疋居るか分らないが，あの魚が一疋も病気をして医者にかゝった試しがない。みんな健全に泳いで居る。病気をすれば，からだが利かなくなる。死ねば必ず浮く。それだから魚の往生をあがると云つて，鳥の薨去を，落ちると唱え，人間の寂滅をごねると号して居る。洋行をして印度洋を横断した人に君，肴の死ぬところを見た事がありますかと聞いて見るがいゝ，誰でもいゝえと答えるに極つて居る。それはそう答える訳だ。いくら往復したつて一匹も波の上に今呼吸を引き取つた――呼吸ではいかん，肴の事だから潮を引き取つたと云はなければならん――潮を引き取つて浮いて居るのを見た者はないからだ。あの渺渺たる，あの漫々たる，大海を日となく夜となく続け様に石炭を焚いて探がしてあるいても古往今来一匹も肴が上がつて居らんところを以て推論すれば，肴は余程丈夫なものに違ないと云ふ断案はすぐに下す事が出来る。それなら何故肴がそんなに丈夫なのかと云えば是亦人間を待つてしかる後に知らざるなりで，訳はない。すぐ分る。全く潮水を，呑んで始終海水浴をやつて居るからだ。海水浴の功能はしかく魚に取つて顕著である。魚に取つて顕著である以上は人間に取つても顕著でなくてはならん。一七五〇年にドクトル・.リチヤード・ラツセルがブライトンの海水に飛込めば四百四病即席全快と大袈裟な広告を出したのは遅い〳〵と笑つてもよろしい。猫と雖も相当の時機が到着すれば，みんな鎌倉あたりへ出掛る積りで居る。（『我輩は猫である』七）

以上まとめてみると，「海水浴」は明治期における西洋伝来の風習であること，すなわち，文明開化のハイカラな風習であることや，明治期においてはレジャーであるよりも，病気対策であり，医療法・健康法の性格を強く帯びていたことなど，どれも我々現代人の「海水浴」感覚とはおおきな隔たりがあると言わなければならないだろう。あえて大げさな言い方をするならば，「海水浴」も「汽車」と同じく，ある意味で明治の人々には西洋化した近代日本の象徴（的行為）であったのである。

「海水浴」と関連してさらに話しを続けよう。文明開化＝西洋化の世の中になり，人々は「海水浴」を知り，「海」に繰り出し，浜辺に集まり，医療・保養あるいは娯楽を目的に「海水浴」を始めた。人々は西洋の風習である「海水浴」を通して「海」と交わっていったということだが，このことはいみじくも開国から「西洋化」につきすすむ明治日本のメタファーとなった。

徳川の鎖国時代，日本は一部を除き，突如，異国との交わりを絶った。以後，島国日本を囲む「海」は，堅固な自然の要害となり，外敵の侵入を許さず，日本に長い「パックス・トクガワーナ (Pax Tokugwana)」（「徳川政権下の日本の平和」）とよばれる平和な世をもたらした。しかし，日本は世界から孤立し，自閉の道を歩む。

「海」は異国を受け入れる入口でも，日本と異国を結ぶ通路でもなくなってしまった。それは，人々にとって，ただどこまでも限りなく広がる青い海原であり，かれらのまなざしは身近な浜辺や砂丘，

あるいは波打ち際にとどまり，波濤を越えたかなたの世界に及ぶことはなかった。今日も明日も変わらない平和で退屈な鎖国の海。これが二百余年の徳川時代を生きた人々の「海」であった[6]。

しかし，「パックス・トクガワーナ」の世も，日本をとりまく世界情勢が長くはそれを許さなかった。アジアへの進出をもくろむ欧米列強が，その拠点・中継地としての日本に強く開国を求め，日本の海に押し寄せたからである。そうした中，嘉永七年（1854），アメリカの東インド艦隊指令長官ペーリー提督 (M. C. Perry) が，太平洋をわたって再度来日，開国を求めて江戸湾に迫ったのを契機に，日本はついに開国に踏み切る。以来，日本は再び，世界に門戸を開き，海は日本と異国をむすぶ通路＝架け橋となった。

いみじくも，明治最大の啓蒙書，福沢諭吉の『西洋事情』(1866) の口絵は青く塗られた「海」に彩られている。文明開化を生きた人々は，この青い大きな「海」をみて，自分たちの時代が開かれた「海」時代であることを実感したことであろう。文明開化とは，いわば島国日本が内にこもった陸の時代から異国に開かれた「海」の時代へ生まれ変わるプロセスであったと言えよう[7]。

徳川幕府崩壊後，明治維新となり，日本にはどっと文明開化の波が打ち寄せる。巷には，「西洋」すなわち，「西の海」からやってきた「洋もの」にあふれる。洋服，洋食，洋館，洋書....「洋」＝「海」の意を冠した文物があふれ，日本は，文字通り，西洋の「海」に浸されるのである。近代化＝西洋化を掲げる明治日本において，「海」はまさに「西洋」＝西の海のメタファーとなり，「海」に目をむける人々のまなざしは近代化をめざす日本のメタファーとなった[8]。以上，比喩的にまとめれば，「海」は，明治を呼び寄せ，明治を作り上げた力ということになろうか。

Ⅳ．「海水浴」―「私」と「先生」のめぐりあい―西洋の影の下に

さて，こうした，「海水浴」あるいは「海」と明治とのかかわりをふりかえり，今，漱石の『こころ』という小説をながめた時，この小説の冒頭に「海」が置かれ，「海」を背景とした「海水浴」の出来事が語られること，別の言い方をすれば，この小説が「海」と「海水浴」を発端として語りはじめられることの意味は，決して小さくないことが理解できよう。ここでいう「海水浴」の出来事とは，無論，二人の主人公，「先生」と「私」が海水浴場で運命的な出会いを果たす話である。実は，この「海水浴」の出会いこそ，まさに小説『こころ』を読み解く重要な鍵となるのである。

ただ，『こころ』には，忘れがちにされるが，もうひとつ，物語の真ん中あたりに，「海水浴」を語る場面がある。「先生」の遺書に語られる，「先生」と「K」の房州旅行の思い出話しの中にでてくる話である。これら二つの「海水浴」は，ともに学生時代，夏休み，そして避暑地のエピソードである。しかし，一方は「都会人種」のあふれる「賑やかな景色」（上 一）に包まれた海浜リゾートでの出来事であり，他方は「何処も彼処も腥さい」「非道い漁村」（下 二十八）の海岸での出来事である。二人が泳いだ海も，一方は「強い太陽の光」が「眼の届く限り水と山を照ら」す「広い蒼い海」（上 三），他方は「拳のやうな大きな石が打ち寄せる波に揉まれて，始終ごろ〳〵し」「すぐ手だの足だのを擦り剝く」（下 二十八）海である。同じ海水浴の話しでも，そこにはあまりにも異質な海水浴が語られている。

『こころ』全体の構成からすると，「海水浴」のエピソードは，このように冒頭と核心部に置かれ，互いに重ね合わされ，対比的に語られている，ということになるだろう。『こころ』の中で，重なり，響きあう二つの海水浴エピソード。これらのエピソードは，『こころ』という物語の本質を捉える上において，重要な鍵となる象徴的な，「寓意的意味」を提供してくれる。本論では，二つの海水浴エ

---

[6] 遠藤泰生「『太平洋』の登場―徳川日本と海」芳賀徹編『文明としての徳川日本』（叢書　比較文学比較文化 1）（中央公論社）108-33頁参照。

[7] 武田信明「『西洋事情』の絵」『三四郎の乗った汽車』（教育出版，1999）33頁参照。

[8] 桂英史「海外という消失点」『東京ディズニーランドの神話学』（青弓社，1999）32-3頁参照。

ピソードのうち，とりあえず，『こころ』の冒頭に置かれた鎌倉海岸の「海水浴」に焦点をあわせて話しをすすめる。

先に触れたように，『こころ』は「私」の手記から始まる。そしてこの手記は回想の形で，「私」が「まだ若々しい書生」（上 一）であった頃，鎌倉の海水浴場で「先生」と出会った運命的な場面から語り始められる。「私」は，夏休みに友達から是非にと誘われ，鎌倉の海へ避暑に来る。しかしその友達がすぐいなくなり，一人だけになって，毎日海に入って過ごしていた。そんなある時，「私」は偶然，海水浴客の雑踏の中に「先生」を見つけ出す。

> 私が其掛茶屋で先生を見た時は，先生が丁度着物を脱いで是から海へ入ろうとする所であつた。私は其時反対に濡れた身体を風に吹かして水から上つて来た。二人の間には目を遮ぎる幾多の黒い頭が動いてゐた。特別の事情のない限り，私は遂に先生を見逃したかも知れなかつた。それ程浜辺が混雑し，それ程私の頭が放漫であつたにも拘はらず，私がすぐ先生を見付出したのは，先生が一人の西洋人を伴れてゐたからである。
>
> 其西洋人の優れて白い皮膚の色が，掛茶屋へ入るや否や，すぐ私の注意を惹いた。純粋の日本の浴衣を着てゐた彼は，それを床几の上にすぽりと放り出した儘，腕組をして海の方を向いて立つてゐた。彼は我々の穿く猿股一つの外何物も肌に着けてゐなかつた。私には夫が第一不思議だつた。私は其の二日前に由井が浜迄行つて，砂の上にしやがみながら，長い間西洋人の海へ入る様子を眺めてゐた。私の尻を卸した所は少し小高い丘の上で，其すぐ傍がホテルの裏口になつてゐたので，私の凝としてゐる間に，大分多くの男が塩を浴びに出て来たが，いずれも胴と腕と股は出してゐなかつた。女は殊更肉を隠し勝であつた。大抵は頭に護謨製の頭巾を被つて，海老茶や紺や藍の色を波間に浮かしてゐた。さういふ有様を目撃したばかりの私の眼には，猿股一つで済まして皆の前に立つてゐる此西洋人が如何にも珍らしく見えた。（上 二）

このあまりにも有名な出会いの場面で注目すべきは二点である。一点目は二人の出会いのきっかけとなったのが，「優れて白い肌の色」をした一人の「西洋人」であったことである。二点目は，その西洋人がいかにも「珍らし」い格好をしていたことである。まず一点目からとりあげていこう。

「私」が浜辺の雑踏の中で注意を惹かれたのは，まずは一人の「西洋人」であり，「先生」はその連れとして，いわば付随的に「見付出」されたに過ぎない。「先生が一人の西洋人を伴れてゐた」からこそ「私」は「先生」を見つけることができたのであり，まさに「特別の事情のない限り，私は遂に先生を見逃したかも知れなかつた」のである。象徴的に言えば，この時，「先生」は，「私」の中では，独立した日本人というより，西洋人と連れ立った日本人，いわば「西洋人」と一対の，西洋の影法師的日本人として認識されたもの，と言えよう。ではなぜ「私」は，「西洋人」に特に注意を惹かれたのであろか。この点については，「先生」に出会う前の出来事として，「私」がこんなことを語っていたことを思い起こすべきだろう。

> 宿は鎌倉でも辺鄙な方角にあつた。玉突きだのアイスクリームだのといふハイカラなものには長い畷を一つ越さなければ手が届かなかつた。（同 一）

「私」は，自分の泊まった鎌倉の宿について，初めに何よりも「辺鄙な方角にあつた」ことを指摘している。この指摘でまず面白いのは，「辺鄙」の度合いが，「玉突きだのアイスクリームだの」の都会的で「ハイカラなもの」との結びつきを尺度にしている点である。「私」の宿が，「玉突き」や「アイスクリーム」などとは「長い畷を一つ越さなければ手が届かな」いようなところにあったとすれば，それは「私」にとって当然のごとく「辺鄙な」田舎宿に過ぎなかったのであろう。他方，「私」が宿

の「辺鄙な」点をことさらに意識するのは，「私」がそれだけ逆に「ハイカラなもの」につよく捉われていることを如実に物語っているからにほかならない。「辺鄙」を語る一方で「ハイカラ」を強く希求する「私」。

「ハイカラ」とは，思えば，明治の文明開化＝西洋化の時代の生んだ言葉であった。英語の“high collar”を日本語に移し変えたもので，元来は文字通り「たけの高い襟」の狭い意味であったが，やがて「物事が，西洋風で目新しいこと。また，そうした欧米風や都会風を，追求したりするさま。また，そのひと。」などの一般的意味となった[9]。「先生」に出会った頃，まだ「若々しい書生」（上 一）で「稍ともすると一図になり易かつた」（同 十四）「私」は，まさにこの「ハイカラ」の意味をなぞるかのように，「玉突きだのアイスクリームだの」，目新しい西洋のスポーツや菓子に惹かれ，鎌倉の海に浸かりながら，その海のかなたにある西洋へ募る思いを馳せていたのかもしれない。

そんな「私」は，やがて「長い畷を一つ越」して，先の引用場面の途中にあるように，吸い寄せられるように，わざわざ，遠くの「ハイカラ」な外国人で賑わう「由比が浜」へ出かける。そして，「砂の上にしやがみながら，長い間西洋人の海へ入る様子を眺めてゐた。」のである。こうした「私」の，まるで追っかけのような，一途な思いや行動を考えたとき，「私」の目に，日本人の海水浴場に一人いる「西洋人」の存在が強く印象づけられたのは，ある意味では当然の成り行きであった。「西洋」へ思いを馳せる一途な若者。「私」は求めるべくして「西洋人」を求め，見出すべくして「西洋人」を見出した，と言えよう。ただこうした過程については，「私」が「若々しい書生」＝高等学校の学生であったことを押さえておくことが必要であろう。

石原千秋の指摘するように[10]『こころ』という小説は，基本的に知的エリートの物語である。「私」と「先生」，そして「先生」の親友「K」，三人はいずれも高等学校，さらに帝国大学に学んだ明治の数すくない超知的エリートたちであった。彼らが学んだ高等学校や大学は，近代化を急務とする明治政府の欧化主義の下にあって，その窓口の役を果たし，いわば，西洋＝「ハイカラ」文化の最先端にあった。高等学校では，学問の基礎として，あるいは知識人の教養としても，英語をはじめとする西洋の言語の修得が最重視され，大学ではいわゆる「お雇い外国人」が活躍し，西洋の知識や学問の普及・指導にあたった時代であった。そんな時代において，西洋の文化や人間は，当然ながら，とりわけ日本の青年知識人にとっては特別な存在であり，また特別な関心の対象であった。「私」が海水浴場で単なる好奇心の域をこえ，あれほど西洋人にこだわり，入れ込むのも，思えば，「私」の中に明治の青年知識人としての強い西洋志向が存在してのことだったのである。そして，海水浴場の雑踏に西洋人を見出した「私」が，やがて今度はその西洋人と連れ立っていた日本人を追い求め，初対面であまりにも唐突に「先生」と呼びかける奇妙な言動も，「私」の抱く西洋の学問や文化へのあこがれの発露と考えれば納得ができよう。

「若々しい書生」，うぶな高等学校の学生であった「私」にとって，「西洋人」と付き合う日本人は，それだけで十分に尊敬の対象であり，西洋の学問・文化を身につけた，学ぶべき「先生」と映った，ということなのである。なお，「私」が実際に「先生は大学出身であつた」（同 十一）と知るのは，後々の付き合いの中であった。とすれば，「西洋人」と連れ立った「先生」が体現する，より正確にいえば，体現すると「私」が想像した西洋の学問・文化への「私」の思い入れはそれだけ純真で一途なものであった，とも言えるのである。「私」がはじめて会った「先生」に対して「どうも何処かで見た事のある顔のように思はれてならなかつた」（同 二）と打ち明ける所以であろう。

鎌倉の海に避暑にきた「西洋」好きの高等学校生。浜辺にたたずむ「西洋人」。その「西洋人」と連れ立ったインテリとおぼしき日本人。この三者が「西洋人」を仲立ちとしてつながる『こころ』の

---

[9] 『日本国語大辞典』（第二版，小学館，2000）参照。
[10] 石原千秋「高等教育の中の男たち―『こころ』」『反転する漱石』（青土社，1997）50-2頁。

成り行きは，いみじくも，西洋の学問や文化が明治の知識人にとっていかなる意味をもったか，そのありようを象徴的に物語っている，と言えよう。明治の知識人にとって，西洋の学問や文化は，好むと好まざるとにかかわらず，自己の思想・人格形成に大きな意味を持ち，お互いにその習得・素養は知識人であることの暗黙の符牒であり，証しでもあった。その意味で，「私」と「先生」は，いわば，西洋人＝西洋の学問・文化を共有コードとして，西洋ネットワークの中で，互いに結びつくべくして結びついた似合いの一対であったのである。

Ⅴ　猿股を穿いた西洋人

ただ問題はこれからである。すなわち，「先生」と「私」をひきあわせた「西洋人」の奇妙な水着姿のことである。繰り返しになるが，念のためもう一度，先の引用の後半場面に戻ってみよう。

> 其西洋人の優れて白い皮膚の色が，掛茶屋へ入る否や，すぐ私の注意を惹いた。純粋の日本の浴衣を着てゐた彼は我々の穿く猿股一つの外何物も肌に着けてゐなかつた。私には夫が第一不思議だつた。私は其の二日前に由井が浜迄行つて，砂の上にしやがみながら，長い間西洋人の海へ入る様子を眺めてゐた。私の尻を卸した所は少し小高い丘の上で，其すぐ傍がホテルの裏口になつてゐたので，私の凝としている間に，大分多くの男が塩を浴びに出て来たが，いずれも胴と腕と股は出してゐなかつた。女は殊更肉を隠し勝であつた。大抵は頭に護謨製の頭巾を被つて，海老茶や紺や藍の色を波間に浮かしてゐた。さういふ有様を目撃したばかりの私の眼には，猿股一つで済まして皆の前に立つてゐる此西洋人が如何にも珍らしく見えた。（上 二）

ここで，「私」の目にとまった「西洋人」は，「我々の穿く猿股一つの外何物も肌に着けてゐなかつた」，「猿股一つで済まして皆の前に立つてゐ」たとある。こんな「西洋人」を「先生」も「風変り」（同上 三）な男と評しているが，「私」の目にも，この西洋人の裸の「猿股」姿は「如何にも珍しく見えた」。「私」は，その理由を同じ「西洋人」でも「由比が浜」で泳ぐ「西洋人」は「胴と腕と股は出してゐなかつた」，「女は殊更肉を隠しがちであつた」からと説明している。西洋人の集まる「由比が浜」で泳がず，わざわざ一人で日本人達に交じり，「猿股」姿の「珍らし」い＝日本的行動をとる「西洋人」をいわば，「変な外人」，「浮いた外人」と感じた，というところだろうか。

実はここには「裸」を「非文明的」，「野蛮」とする西洋の価値基準，さらに外国人の日本への「同化」といった，大きくて微妙な文化格差の問題が潜んでいるのだ。このあたりの事情について，作家・ジャパノロジストとして知られるリービ英雄は興味深い指摘をしている。

リービがアメリカの大学の「東洋学科」の学生であった頃の話である。授業で『こころ』がとりあげられた。クラスには，彼自身のように，「日本に滞在したことのある者や日本で生まれた混血の生徒」も何人か混じっていた。『こころ』が読み始められたとたん，ある白人の生徒がとつぜん，「猿股の西洋人」について，同級生の顔を伺いながら，「こういう人を，日本語でなんというか，知っていますか」「変な外人と言います」と得意げに自問自答した。一瞬，クラスに何とも言えない気まずい沈黙が流れたという。リービは，この話について次のように述べている。

> 子供時代や思春期を日本で過ごした外人の青年たちに，この［猿股の西洋人］イメージが気まずい沈黙やはずかしそうな笑いをそそったのは，ほとんど無意識に内在化したタブーを，猿股の西洋人が冒したからではなかったか。よそ者として昭和の日本に生きたことがある人間なら，誰しも内在化せざるをえなかったタブー。日本人と人種を異にした者は，日本人のような振舞いをするな，日本語を日本人のように話そうとするな，日本的な感性を身につけようとするな。日本人は名誉白人にはなりうるが，だれも名誉日本人になることは許されない。中国の歴史には蛮族

の同化が歓迎されたが，近代の島国は蛮人の「文明化」を歓迎しない。.逆にタブーをきちんと守り，人種＝文化という鉄則を心に刻みさえすれば，特権階級の一員としての生活が保障される。それが昭和の日本に生きる外人にたたきこまれた常識ではなかったか。

....「こころ」の中で，「先生」が「友人」といっしに描写されているのは，Kと「私」の他には，この西洋人しかいない。しかもその「風変り」の人柄も，単なるエキゾチシズムではなく，むしろ「先生」と友人でありうる資格を実証しているのではないか。脱亜にひたすらな島国の渚にたつ脱西洋人の西洋人，西洋のソサイエティに裸な背を向けて，しかし日本の共同体の中で一人で立つ西洋人が，明治末期の「現代」に対する「先生」の疎外感と，好一対になっているのではないか[11]。

リービの指摘によれば，日本でくらす「外人」の間には暗黙の犯すべからざるタブーが存在する。それは，「外人」たる者，「日本人のような振舞いを」してはならない，「日本的な感性を身につけようと」してはならない，すなわち，日本化してはならない，というタブーである。この「人種＝文化」のタブーをまもる限り，日本でくらす「外人」には，特権的な地位・生活が保障される。それを破ることは，「外人」たる資格＝アイデンティティを失うことであり，破れば結局「日本人」からも「外人」からも「歓迎」されず，「変な外人」として疎外・孤立の憂目をみるだけである。

こうした指摘に照らしたとき，『こころ』の冒頭にいきなり登場する「猿股の西洋人」というイメージは，たしかに，日本で過ごしたことのある外人には，「気まずい沈黙やはずかしそうな笑いをそそ」る存在でしかなかったであろう。「猿股」姿で泳ぐという行為は，日本では許されても，彼らにとっては許されない行為であった。海水浴とはいえ，猿股は下着であり，下着で泳ぐということは裸同然で人前に出る行為に等しかったからである[12]。「西洋人」が「猿股」で泳ぐのは，日本にくらす「外人」の明らかなタブー違反だったのである。

日本では，昔から，人前で肌をさらすことに対してさほど違和感をもたない。褌はかっては男のしるしであったし，相撲は国技である。また公衆浴場は文字通り，庶民の「裸のつきあい」の場であり，娯楽の場である。「裸」に対しては，おおらかで開放的な伝統がある。他方，「西洋」では，禁欲的なキリスト教の影響もあり，「裸」は恥，堕落，野蛮などとして否定されるのが常であり，人前で肌をさらすことはタブーである。この社会的＝文化的隔たりはおおきい。『こころ』の「猿股を穿いた西洋人」は，あえてこうした壁を越え，「日本化」した「西洋人」であった。リービ流に言えば，「脱西洋人の西洋人」ということになろう。そしてこの「風変り」な「西洋人」は，「日本化」＝「脱西洋」の代償として，「西洋のソサイエティに裸な背を向けて，しかし日本の共同体の中で一人で立つ」孤独な「西洋人」となるのであった。

リービは，最後に『こころ』における「猿股を穿いた西洋人」のこうした孤独について，「明治末期の「現代」に対する「先生」の疎外感と，好一対になっているのではないか」と結論づける。鋭い指摘である。

「先生」はたしかに「明治」という彼の「現代」から疎外された人間である。そんな「先生」は

---

[11] リービ英雄「猿股の西洋人―『こころ』の一描写について」『群像』(1988.2) 174-5頁。

[12] 「猿股」は，日本人の伝統的な男性下着であった「褌」にかわるものとして，明治期に普及した。海水着として，西洋風に「股引き」から考案されたのが始まりで，これが後に男子の日常的下着に定着していったと言われる。『世界大百科事典』第12巻（平凡社，1981）参照。

「猿股」は，「野蛮」として「西洋人」から何かと嫌悪された「褌」を西洋風にあらためたものであったが，あくまでも「西洋人」からみれば下着であった。ちなみに，『こころ』の英訳として誉れ高いマクレランの訳書においても，「猿股」は，“He had on him only a pair of drawers such as we were accustomed to wear.”とあるように，“drawers”（「下着」）としか訳されてない。Cf. *KoKoro*, translated by Edwin McClellan (1957; Tokyo: Charles E. Tuttle Company), 1991, p.3-4.

「淋しい」という言葉を何度も口し，ある時，「私」にむかって「自由と独立と己とに充ちた現代に生れた我々は，其犠牲としてみんな此淋しみを味わわなくてはならないでせう」（上 十四）とつぶやく。「先生」のこの言葉は，彼の孤独感が「明治」という時代の必然的産物であることを意味している。近代化＝西洋化により，「明治」の社会は，身分制や村・家の束縛がゆるみ，個人の自由が拡大した。しかしそれとひきかえに，帰属意識が希薄化し，人間関係が不安定となり，人々は自由のかわりにもたらされた不安と孤独に苛まれるようになった，ということだろうか。

「先生」の語る「淋しみ」が「明治」という時代の「淋しみ」とするなら，孤独なのは「先生」だけではない。「私」もまたある意味で孤独である。ただ「若々しい書生」（同 一）である本人はまだそれを自覚していない。水川隆夫が指摘するように[13]，「当時の『私』がそのことを自覚しなかったのは，『国許』（上 一）や『学校』（同）などへの帰属意識によって，孤独の不安から逃避していたからである。」

「私」は国に帰るたびに父母とは疎遠になり，心を打ち明けあえる親友もなく，とくに交際する女性もいなかった。「私」は心のなかで自分の孤独を癒してくれる存在を求めた。そんな折，たまたま「先生」にめぐりあった。「先生」は「西洋人」と連れ立っていた以外は「超然」として，「いつも一人」（同 三）であった。「私」はそんな「先生」に孤独の影を見出し，孤独なもの同士の親近感から「先生」に惹かれてゆく。「私」を「先生」に結びつけたものが，「西洋人」＝西洋の学問・文化を共有コードとした，西洋ネットワークであることは先に述べたとおりである。しかし，西洋化された「明治」の「淋しみ」もまた，皮肉な結果ではあるが，二人を結びつける絆となったのである。

かくして，「明治」の三人の孤独な人間が「海」に集まり，浜辺に立つ。その一人は「日本化」した「西洋人」。もう一人は，連れの「西洋化」した「日本人」。さらにもう一人は，二人を見つめる，これから「西洋化」の洗礼を受けんとする若い書生＝学生。この構図は，きわめて象徴的・寓意的である。

まず「猿股」姿の「日本化」した「西洋人」と「西洋」の学問・知識を修めた「大学出」（同 十一）の「先生」，いわば「西洋化」された「日本人」[14] の組み合わせ。この二人について，リービは，先に，それを明治社会における「疎外」された「好一対」のコンビと呼んだ。

たしかにそのとおりであるが，ここでもう一つ指摘しなければならない点がある。それは，「猿股を穿いた西洋人」のいささか，こっけいな道化じみた姿が，実は，「西洋化」した「日本人」＝「先生」の裏返しの自画像，パロディーではないか，ということである。「猿股を穿いた西洋人」には，人種を超え，異文化に過度に同化することの意味，すなわち，明治の近代化＝西洋化の意味が自虐的に投影されている，とでも言えようか。

リービの言う，「人種＝文化」の鉄則は，日本における「外人」の同化に適応された。この鉄則を破るものは，「外人」の資格＝アイデンティティを奪われ，いわば「変な外人」＝道化として嘲笑されるだけであった[15]。このことは，翻って言えば，皮肉にも，日本において「西洋化」した「日本人」にもあてはまるのだ。「西洋化」し過ぎた（かもしれない）「先生」は，「日本人」としての資格＝アイデンティティを喪失した，「道化」とも言えるのだ。その意味で，「猿股を穿いた西洋人」は，「先生」の反面教師であり，まさに「先生」の負の分身の役目をはたしている，と言ってもよいだろう。

周知のように，この「猿股を穿いた西洋人」は，『こころ』の冒頭に一度あらわれたなり，忽然と

---

[13] 水川隆夫 『夏目漱石「こころ」を読みなおす』（平凡新書，1995）32-3 頁。

[14]「先生」の家の「書斎には洋机と椅子の外に，沢山の書物が美しい背皮を並べて，硝子越に電灯の光で照らされていた。」そして客のもてなしには「紅茶」と「菓子」が出された，とある（上 十六）。文字通り，「西洋化」された「日本人」に似つかわしい西洋式すまいと生活である。

[15] ちなみに，リービは，「猿股の西洋人」のモデルの一人として，漱石とは因縁あさからぬ関係にあった，カフカディオ・ハーン（Lafacadio Hearn，1850-1904）をあげている。ハーンは，よく知られているように，

その姿を消す。それは，「私」を「先生」に引き合わせるのが彼の役目であり，その役目を果たしたあとは消えるだけのことなのだろう。彼には，むろん「私」が入れ替わる。「私」こそ，「先生」に寄り添い，明治の西洋的知識人＝「先生」の生き様から多くを学ばなければならないからである。

「海水浴」の場面に話をもどす。「私」は，海辺に立って，何度か「先生」と接触をここみる。なかなかうまくいかないが，やっとその機会をとらえる。

> 次の日私は先生の後につゞいて海へ飛び込んだ。さうして先生と一所の方角に泳いで行つた。二丁程沖へ出ると，先生は後を振り返つて私に話し掛けた。広い蒼い海の表面に浮いてゐるものは，其近所に私等二人より外になかつた。さうして強い太陽の光が，眼の届く限り水と山とを照らしてゐた。私は自由と歓喜に充ちた筋肉を動かして海の中で躍り狂つた。先生は又ぱたりと手足の運動を已めて仰向になつた儘波の上に寐た。私も其真似をした。青空の色がぎら〳〵と眼を射るように痛烈な色を私の顔に投げ付けた。「愉快ですね」と私は大きな声を出した。（上 三）

これも出会いの場面同様，あまりにも有名な場面である。「先生」「K」をはじめとして，登場人物がつぎつぎに死んでゆく『こころ』の物語は，先にも触れたように，いわば死の物語である。それだけに，「太陽の光」に照らされたまばゆいばかりの美しい自然に囲まれ，「自由と歓喜に充ちた」，この生命の躍動するような「愉快な」場面は，きわだっている。全編が息詰まるような，『こころ』という小説の唯一，開放的な場面と言ってよいだろう。二人の他には誰もいない。「広い蒼い海」。二人は母なる「海」に存分にその身をゆだねて喜びに浸る。

我々は先に「海水浴」が西洋からあたしらく伝わった「明治」の慣習であり，海水浴場がなによりも医療・保養の場として始まったものであることを学んだ。「海水浴」そのものは，やがてレジャー化してゆくが，「明治」の「海水浴」は本来的には，医療＝治癒の場であり，いわゆる今風の言葉でいえば，「癒しの場」であった。このことを考え合わせた時，「先生」と「私」が歓喜にふるえるこの泳ぎの場面は極めて象徴＝寓意的である，といわなければならない。二人の泳ぎは，明治の孤独と苦悩を背負った人間同士の「癒しの行為」というメッセージを我々読者に伝えているのだ。

しかし，この，いわば「癒しの場」である「海」は，冒頭からあっという間に姿を消し，明治の人々の前からも消えてゆく。次の「海」がふたたび姿をみせるのは，先にふれたように，のちのちの「先生」の遺書の中である。それは，「拳のやうな大きな石が打ち寄せる波に揉まれて，始終ごろ〳〵し」「すぐ手だの足だのを擦り剝く」（下 二十八）「海」である。それは，「癒し」の「海」ではなく，それとはまったく異質の，いわば「苦しみの海」，「死の海」に他ならない。生から死の「海」へ，この劇的移行・変化の語る意味は何を物語っているのだろうか。このことも含めて，我々はさらに『こころ』という小説の持つ「寓意性」，明治の「寓意小説」としての『こころ』について分析をすすめなければならないが，それについては次回の考察に委ねることとしたい。

明治の中頃，来日。「お雇い外国人」として，松江中学，熊本第五高等中学校で教鞭をとった。その間，日本人の小泉セツと結婚し，日本に帰化して小泉八雲と名乗り，文字通り，「日本化」した「西洋人」になった。

第五高等中学校の後，東京帝国大学の英文学の講師になったが，折からの「お雇い外国人」雇用政策の転換――莫大な費用を要する「お雇い外国人」を随時，留学先から帰った日本人に替える――にあい，突然解雇される。この事件をはじめとして，晩年のハーンは，「外人」＝よそ者故のトラブルが絶えず，「西洋化」する日本にも失望し，孤独にさいなまれていた，という。

このハーンを追い出すかたちで，後釜にすわったのが，実は誰あろう，英国から帰った夏目漱石であった。